

令和7年度第3回静岡県産業教育審議会 会議録

日時：令和7年6月30日（月）

午後2時から4時まで

場所：静岡県男女共同参画センター第3会議室

○事務局（向中野班長）

本審議会は、会議規則の第3条第2項に、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができないとあり、本日の審議会は、12人の委員中現在11人御出席をいただいているので、審議会が成立している。

1 教育部参与あいさつ

- ・本日、委員の皆様には、前回までの議論を踏まえつつ、「育成したい生徒像」、並びに「『育成したい生徒像』に必要な学び」について、御意見、御提言をお願いしたいと思っている。
- ・これからの社会を担う人材育成において、産業教育が果たすべき役割を改めて見つめ直し、単に特定の学科内での教育にとどまることなく、異なる分野が有機的に連携し、新たな価値や発想を生み出す仕組みづくりが、これからの専門教育において重要であると考えている。
- ・例えば、工業と商業、福祉と農業といった異なる分野が互いに補完し合いながら共同でプロジェクトを進めることで、生徒たちは実社会で求められる複合的なスキルを効果的に身につけることが可能となる。
- ・また、地域企業や他校との連携を促進し、多角的な視点から課題解決能力を養う環境を整備することも重要である。
- ・このような取組は、1つ1つの専門性を深めるだけでなく、それらを掛け合わせることで新しい価値観やアイデアを創出することが、未来志向の産業教育に不可欠となる。
- ・この場で交わされる貴重なご意見やアイデアは、新しい産業教育の方向性を示す上でかけがえのない財産となる。
- ・教育委員会としても、一層魅力的で実効性のある教育体制づくりに向けて、着実な歩みを進めていく。

2 事務局説明

(1) 第2回審議会概要説明

- ・委員の皆様にご確認いただきました第2回産業教育審議会の議事録は、県教育委員会のホームページに公開させていただいている。
- ・今回は、第1回、第2回審議会の会議録を資料5に概要としてまとめている。

(2) 本日の協議について説明

- ・資料4ページ「資料4」を使用し、本日の協議について説明を行った。
- ・第3回審議会については、論点整理が不明瞭であったため、今回は、協議テーマをあらかじめ示した。
- ・1つ目の論点は、改めてここで「育成したい生徒像」にまず焦点を絞って、委員の皆様方のご意見をいただき、共通理解を図っていきたいと考えている。
- ・論点①の下に、黄色い枠の中で例とあるが、育成したい生徒像の例を掲げた。本当に企業が求めている人材なのか、社会や産業界の考えと記載の内容に乖離がないのか、またもう少し細かくして表現した方がよいのではなか等の御意見をいただきたいと思う。
- ・事務局の方でも、今回「デジタル化」という言葉を使用しているが、高校段階に求める知識や技術は、ど

のようなものなのか、専門高校における共通の方向性の中で考えるべきなのか、もしくは専門部会という分野の中で考えるものなのか等について、論点①の中では御意見をいただいて、委員の皆様から共通の方向性を見つけ出していきたいと考えている。

- ・共通の認識ができたところで、論点②について御意見をいただきたいと思う。
- ・論点②については、この育成したい生徒像に必要な学びの方向性はどういうものなのか御意見をいただければと考えている。前回いただいた意見の中でいくつか出ていますが、まだ十分ではないのかなと思っている。例えば、高校レベルで必要な共通のデジタルリテラシー、それから企業側の視点を取り入れた学び、リベラルアーツも含めた統合的な教養教育、そういったようなご意見も前回は聞くことができた。どのような知識、技術をどの程度学ぶ必要があるのか等、御意見をいただきたいと考えている。
- ・この学びの方向性を考える中では、具体的な取り組みイメージと合わせて、御意見をいただいても構わない。
- ・本日は、大きく論点を2つ出させていただいた。これらについて、御協議をお願いしたいと考えている。

3 協議

(1) 論点①「育成したい生徒像」とは？

○川田委員

・それでは、協議に入らせていただきたいという風に思います。ただいま事務局の方から、1つ目の論点として、育成したい生徒像ということが挙げられました。

・前回の審議会におきましても、ゴールの共有がまず必要ではないかというご意見がありましたので、ここについて本日は議論させていただきたいという風に思います。

・事務局から出していました資料4に、育成したい生徒像の例が挙げられていますが、まず、企業が求めている人材はこの例に挙げられているような人材なのか、社会や産業界の考えと乖離がないか、もう少し掘り下げた表現が必要ではないかなどご意見をいただいて、まず「育成したい生徒像」について皆さんで共有したいという風に考えています。

・あと、冒頭の事務局の説明でデジタル化についても話がありましたが、高校段階においてどのようなことを学んでおいたらいいのかということについて、不明確な部分もあるかと思しますので、ぜひご意見をいただければという風に思います。

・また、現代のデジタル環境というのは、非常に多岐にわたって高度化しておりますので、専門分野ではロボティクスなどを例に挙げることはできますが、どの分野の学習においても共通して学ぶ必要があると思われるものはどのようなものかということについて、ご意見を伺いたしたいと思います。

・そこで、まず初めに江頭委員にお伺いしたいと思います。企業の立場から、高校生段階に求めるデジタルリテラシーがどの程度必要と思われるか、または基礎としてどのような力があるとよいかということについて、ご意見をいただきたいという風に考えています。

・これぐらいの知識、技術を持ち合わせた人材が必要であるということについて、ご意見をいただければという風に思います。

・では江頭委員、よろしくお願いします。

○江頭委員

・企業の立場として、高校生のデジタルリテラシーというと、言語化するのは難しいところなんです。高校生ということ、新たにデジタルツールを開発するような高度な知識というところまでは企業としても求めて

いません。

・逆に、今、既存である、活用されているデジタル技術に関する知識を持っていて、その技術を活用する方法をしっかりと知っているということは基本的に求められたりします。

・ペーパーレス化を初めとして、仕事をする上で、例えば、私たちだと工場を持っているので、工程のチェック一つにしても、紙でチェックということはしてなくて、デジタルチェックを行っていますので、基本的なパソコンを使えますとか、ワードやパワポで資料が作れますというところは、最近の高卒で入ってくる子たちはできているので、学校で学んでいるのかなと思います。

・プラスして、私たちだと議事録の作成もAIがやっていたりします。今後そういったところが進んでいくと思われるので、より業務を効率化するためにAIの活用は進んでいこうと思います。なので、基本的なそういったものの使い方。世の中に情報が非常に満ち溢れていると、AIを使うことが主目的ではないけど、これは正しいか正しくないかという心眼の目を持たなければいけないので、その意味でもツールを使うということはできると良いのではないかと思います。

・プラスして、数年前、数十年前と大きく違うのは、ネットワークにつながってデジタルツールを活用することが非常に求められるので、要するに、クラウド等を含めて、外と繋がることによるリスクというのが出てくることも踏まえて、そのような知識も基本的に持っているといいということも、理想論に近いところかもしれないが、企業の中で今、求められる部分であると思います。

・プログラミングの授業がもう活用されているので、簡単なプログラミングというのは、多分学生さんも今、できるのではないかなと思うんですけど、そのようなロジカルな考え方というのは非常に役立っていくだろうということで、そういったところも求められるかなと思います。

・今、「デジタルリテラシー」というキーワードだったので、できたらいいなということも含めて申し上げましたが、基本的にはやっぱり考える力がないと、今あるツールを活用できないので、まず考える力。あとは基本的な知識を知って考える力を持って活用していく。

・さらに、実業高校の強みというのはアナログ的なところ。実務に沿った知識をたくさん持っているところだと思うので、そのアナログ的なリテラシーとデジタルリテラシーがうまく噛み合うと、さらに新しいところに行けるのではないかなと思います。今、私たち企業も、アナログ的なことができる人とデジタルが得意な人と二分化している面があって、それをどう融合させていくのかというのが、企業の中でも課題の一つであるとすると、今からデジタルを古い世代よりも先んじて学んでいる学生たちは、アナログな部分にどれだけデジタルを活用できるかという考える力をつけられると良いのではないかなと、企業側からは思います。

○川田委員

・今、江頭委員の方から、デジタル化について企業がどのようなことを求めておられるかということについてご意見をいただきましたが、これに関しまして、皆さん、ご意見とかご質問をお願いできればという風に思います。

・また、デジタル化に限らなくても、こういう学生さんにこういう能力を育成すべきではないかというようなことを、ぜひご意見をお願いできればという風に思います。

○齋藤委員

・今の江頭委員の話はよく分かり、高校生に限らず大学生も同じかなと思っています。

・今回、いろいろと議論しているが、果たして高校と大学の違いは何なのか、と私はずっと思っていて、我々、大学でもやはり同じようなことを考えているんです。そうすると、高校生に要求することと大学の学生に要求

することは、どう違うのかなってということが非常に難しいと思っています。

今の江頭委員のお話は、高校生に限らず大学生でも同じことかなという気がします。

・そうすると、高校とか大学とかというよりは、どういう能力を持った人が育っているのかということになるのかと思うんです。自分の持っている知識を使えているかどうか。考え方が成立していて、こういう場合にはこうすればいいんだと。要するに、問題発見・解決能力があれば、別に高卒だろうが大卒だろうがいいのかなという気がするんです。

・そういう意味では、非常にこのテーマが難しいと思うんですけども、高校生だからこうしなければいけないとかいうことではなくて、社会に出ていくためにはこれが必要だというような観点で見れば、今のお話はその通りかなと思います。

・これ大前提だとは思いますが、そもそも例えば、文章の理解力、文章の作成能力、コミュニケーション。これは高校生も大学生も共通なのかなと思うんです。

・専門教育だから当然こういった専門の話が出てくるとは思うんですけども、コミュニケーションスキルという言葉だけはあるが、それ以外のところがなくて、まずは文章の理解、それから作成、そしてコミュニケーション能力ということが大事なかなと思います。

・グローバル化という言葉も出ているが、グローバル化は別に英語ができればいいというわけではなくて、世界の情勢がどうなっているのか、その中で日本はどういう状況なのか、何をすべきかということがわかっているかどうか。言ってみれば、自分のことがきちんとわかっているのかどうかのかなという気がするんです。そういう意味で、自分のことがきちんと理解できて、他の人のことも理解できるというような人物像があって、それプラス専門的な知識がついてくればいいのかなという風に思っております。

○村木委員

・今、お話を伺っていて、そうだとずっと頷いていました。

・大学生に何を求めるか、高校生に何を求めるかということではないんですけども、例えばAIとかIoTとかは、私どもも産業界にいて日々学んでいるわけなんですよね。

・こういったものの進歩はすごく早くて、今、最先端のことを高校生が学んでも、社会に出た途端に陳腐化しているかもしれません。そうすると、新しいものを自ら学ぶというか、この探索していく力をどのようにつけていくかというところはすごく重要なかなと思っています。

・そのための動機付けですよ。モチベーションをどういう風に維持するかというあたりが、育成したいというか、持っていてもらえると嬉しいなという能力かなと今感じました。

○西村委員

・自分自身の「強み」と「弱み」を理解しているか否かで、その後の成長の仕方は大きく異なります。これは、スキルや技術的な面だけでなく、性格や思考の癖なども含めた自己理解を意味します。

人材の流動性が高まる中、働き方そのものが大きく変わりつつあります。

この資料にあるようなスキルや素養は、現在の大手企業に勤めている人でも十分に身につけていないケースが多いと感じています。

一方で、今の若い世代はいわゆる“デジタル・ネイティブ”であり、自然とそうしたスキルを身につけていることもあります。ただ、それよりも大切なのは、自分の特性や資質を正しく理解しているかどうかという点です。

人は一生学び続けるべきであり、「自分は学び続けていく存在である」と実感している人は、大きく成長し

ていくように思います。

○岸田委員

- ・皆様のおっしゃった通りかなと思っている。
- ・それに付け加えて、静岡県の産業教育審議会ですので、静岡県の中にある産業の企業から言わせてもらうと、地元への愛着を心から持ってくれる人がいいのではないかと考えています。
- ・私も新入社員の人によく言うんですけども大きく3つ。「やる気、負けん気、素直な気持ち」。これがあれば大体企業はやっていけるかなと考えていますので、高校生なので、底辺のところをしっかりと理解をしてやっていただける人を育てていただきたいなと思います。
- ・当然、技術はすぐに陳腐化してしまうので、それは企業でもしっかりと教えていくので、下地がしっかりできてくれる子。どんなに優秀な子どもでも素直な気持ちがないといくら教えても全然身に入ってこないのも、そういうことをしっかりとやってくれる人。2つ目の○に書いてある「柔軟性を備えた人材」という言葉もいいが、いろんなことに対して、俯瞰的に物事を捉え得て、気づける方。
- ・基本的なことをしっかりと高校の時に身につけていただくのは非常にいいのかなという風に思っています。

○横田委員

- ・江頭委員がお話しされた「アナログ実務」という部分について、具体的にもう少し教えていただければいいでしょうか。
- ・先ほどから出ているコミュニケーション能力とか、そういうようなものをイメージされているのか。もう少し違うものなのかというのが、わからなかったのが、よろしく願いいたします。

○江頭委員

- ・コミュニケーションのところもあるが、私たちは工場をもっているのも、工程でいうと、例えば鋳造するか、組み立てるといふところの技能的なところの部分。
- ・課題を抽出できる力というのは、実際の現実がわかってないと、デジタルを使ってどうするのかというところはいつかないという意味合いで、アナログのリテラシーもしっかり持ちましょうという話を企業ではしております。

○横田委員

- ・ありがとうございます。技術に対する技能というようなイメージでよろしいでしょうか。

○江頭委員

- ・そうですね。

○川田委員

- ・皆さんがおっしゃったことはまさにその通りだなと思っています。
- ・物事を学んでいく力を身につけていくことが、これから長い人生があると思いますので、人生をいかにうまくしていくかということ。いろんなことを学んでいきたいとか、いろんなことを勉強したいという思いが、好奇心が必要だなと思っています。
- ・今後、デジタル化が進んでいき、AIが非常に進んでいくと思うんですけど、本当に正しいのかを見極めら

れる力や変だなどと思ったら自分で調べてみるというような能力は重視されるのではないかと思います。

○奥田委員

・皆様のおっしゃることは、もっともだなど思いながら、家庭・福祉は全然違うところに立っているなというのを感じています。

・人の生活を支えるということを、日々の産業分野ではなくて、日々の家庭生活を支える部分、生きていくことを支える部分を、専門職として支援を提供していく人たちを養成するので、まずその生活がどのようにできているのかという、基本的な自分たちの生活自立ができるということが、まず支援をする人には大事だという風に考えています。

・家庭とか福祉の分野では、生活自立ができるということが、育成したい生徒像としては、私は育まれることが大切だと思っています。

・パソコンが使える、それからAIをうまく使えるようになることは進めていけばよいが、自分でその知識を正しく判断して、批判的思考を持って使えるということが、高校生なりにできるということが必要かなという風に思っています。

・大学生もそうですけど、すぐ正解を欲しがるので、正解はない、自分たちで考えなければならない、誰も正解を知らないから、いろんな分野の人ときちんと関わらなければならないということを、福祉は特に多職種協働なので、いろんな専門職の人とできるだけ対等に自分の専門性の中でものを言っていかななくてはなりません。高校で介護福祉士を取ると、他の専門職は、みんな大学、専門学校を出て、高校から3年から6年ぐらい余分に勉強してきた人とチームの中で、例えば医療職が言うことは医療職の常識では正しいかもしれないけど、その人が今これを食べちゃいけないというのを医療職の価値観だけで私は賛成できないと言えるような、もうある程度まで、生きてきてこれから先好きなものも食べられないのかと嘆いているような人に対して寄り添えるような介護福祉職を私たちは作りたいという風に短大の中でもずっと養成教育をしていますので、そういう点では、専門性を極めていくことは、さらに大学に行ったり、大学院に行ったりということではできるが、専門職としての目を持つということを高校生であってもぜひ持ってほしい。

・論点1の中では出てこないんですけど、教養教育のところがとても大切だという風に思っています。人を支える、人を理解する上で、AIの言うことではなくて、その人を見て、その人の気持ちに応えるということが、AIの助けも使えるが、やはりそこで考える力というのを育成していけるということが、高校までだと教育の中でできる最後のチャンスなのかなという風に思っています。

○上野委員

・技術的な質問をしてもよろしいでしょうか。最終的にキャッチフレーズみたいなものを作るんですか、そんなイメージでやっているのか。それとも羅列するのかということによっても変わってくるかなと思っています。

○事務局

・キャッチフレーズとまではいかないですけども、委員の皆様方のご意見を事務局で集約して、文章的なもので作り上げようとは思っています。

○上野委員

・はい、わかりました。そうすると、例に出ているものをベースにして変えていくような感じですか。

○事務局

・そうですね。

○上野委員

・はい、わかりました。ありがとうございます。

○川田委員

・コミュニケーション能力を上げましょうとか、幅広くというのは、もちろん今後いろんな分野に取り組んでいく上で非常に重要だというのは私もよくわかります。その一方で、専門性もきちんと柱を立てていただかないといけないのではないかという思いもあって、そのバランスをどう取るのか。大学でも、最近、幅広くみんな勉強しましょうということばかり言われてしまって、でも、専門性のところで、なんでこれがこんな知識になるんだというところを何日も悩んでみるとか、そういう専門性を深めるところが非常に重要だなと思っていて、そのバランスをどう取るのかということもしっかり見極めないといけないのかなという思いを持っています。

・工学部の人間なので、やはり専門性は重要だという気はしています。

○齋藤委員

・この議論は専門高校で何を学ぶべきかという話ですので、当然そういった話が出てくるかと思うんですけども、その専門高校がたくさんありますよね。農業、工業、商業とそれぞれのところで、専門部会で議論されているとは思いますが、それらに共通するという点で絞っておく必要があるのかなと思います。

・例に4つほど挙げられていますが、この全てをカバーできるかどうかわかりませんが、先ほど奥田委員からもありましたように、自分ができること、それと他の人が何を求めているかということを考えますと、社会が何を求めているのかということ。その社会が求めていることに対応できる能力を持つと、それが自分の専門分野であればそういった技術や知識になるということだと思いますので、基礎的な部分と専門的な部分をうまく橋渡ししてやっていくにはどうすべきかということが、最終的な落としどころかなという風に思います。

○西村委員

単なるキャッチフレーズを作るということではなく、生徒像をしっかりと文章として言語化し、まとめていく作業であると理解しております。

この4つの方向性じゃどの都道府県でも共通して想像できる内容であり、教育関係者でなくてもある程度イメージできるのではないかと感じました。

静岡県の産業界が求める人材像など、論点をもう少し具体的に絞ることで、各委員のご意見も出しやすくなるのではないかと思います。

○事務局

・今、西村委員がおっしゃられたように、優等生的な例として、挙げさせていただきました。

・岸田委員もおっしゃられた静岡県産業教育審議会というところは、1つ論点の付け足しのところになってくると思います。

・ただ、静岡県は広いです。地域によって産業も異なるところもあるので、一概にまとめて言うことは難しい

が、そのようなところも踏まえてご審議いただければなという風に思っています。

○川田委員

・今、西村委員からご提案のあったように、人材育成のところをもう少しフォーカスしてということなので、岸田委員からもあったように、静岡県ということも加味して、皆様から御意見いただければと思います。

○岸田委員

・専門高校の幅が広いので、農業もそうですし、水産、工業も含めてとなると非常に幅広いので、ここのメンバーで、全部できるかというところすごく難しいと思うんですね。だから、専門部会があって、そこで静岡県のいろんな企業だとか農業関係者ですとか水産加工業者ですとか、いろんな方から多分聞き取り調査をされていると思うので、その中から「こういう専門的なものが必要だ」という風に聞いています、「こういうことを伸ばしていきたいんです」という専門部会からの報告があって、それが本当に合っているんだろうとか、我々はこういう風に考えますという形であればできるかなと思うんです。ここで正直、農業のことを、私がどこまで知っているのかといったら、あまりよく知らないので、こういう人材を育てたいんだという言葉が出てこないと思うんです。

・先ほどの通り、専門的なことだけやっても、結局、村木委員が言われたように、すぐ陳腐化してしまうので、そこも必要なだけでも、企業に入っても大学に行っても、勉強をするんだという意味や気持ちとか考え方をこの高校の時に育ててもらいたいと思っている。今、企業でも、3か月ぐらいで辞めてしまう人が多い。しかし、企業は人を育てようとしている。なので、連携をしてやっていかないと、なかなかこの審議会だけで全部をこうやるとか、細かいところまでこうだというのは難しい。

・ただ我々としては、先ほどの通り、静岡県の審議会なので、静岡県の特徴のあるものをやっていく必要があるのではないかということまではできるが、具体的などころまではわからないというのが現実です。

○新林委員

・今、お話しくださった様々な意見、その通りだなという風に思います。

・静岡県の産業界についてということに、注視することは必要なという風に思いますが、今おっしゃってくださったように、やはり具体的なところというのは難しいかなという風に思います。

・私はいろんな地域のいろんな職種の高校を転々としていますけれども、その地域で求められているような産業界、その学校が求められている連携した時の生徒像というのは、地域性とか、産業の性質または特質が違っているので、それぞれのところで求められていることというのは、静岡県は広いため違っているのではないかとこの風に思います。

・それなりに対応できるような高校というのが、それぞれ必要になるのではないかとこの風に考えました。

○岸田委員

・先ほど江頭委員が言われた「アナログとデジタルの融合」ってすごく重要だと思っています。ややもするとデジタル化にずっと行くんですけども、実はそうではなくて、工業高校だったら一体それはどういうことを具体的に静岡県の企業が求めているのか、それが、水産だったらどうなのか、農業だったらどうなのかというような議論ができれば、我々としても俯瞰的に見て、そういうものが必要ではないのかという提言までさせていただいて、それから先の具体的なものを、各専門部会でやっていただけるような形。それをまた挙げていただいて、その通りだよなとか、あるいはちょっと違うんじゃないのかという議論をさせていただけるとい

いなと思います。

・皆さんの御意見の中にすごく重要なコンテンツがいっぱい出てきたと思うので、そのあたりをどういう風にやっていくかということが重要だという感じがします。

○江頭委員

・私たちの会社は、元々「マイスター・ハイスクール」という、工業高校に先生を出すことをやったのですが、なぜ私がそれをやろうと言いつ出したのかというと、私たちの会社はものづくりの会社ですけど、今、企業で起きていることを生徒たちに直接知ってもらって、興味を持ってもらって、もっとこういうことを学びたいというところに繋がれたらいいかなというのが根底にありました。もちろん、リクルートもありました。

・私たちの会社は浜松市にありますけど、日本はロボット大国で、その中のロボットを作っている企業が静岡県の浜松市にある。生徒たちがもっと学びたいと思えば、もっと学べる環境を提供できるっていうところを、工場見学をしてもらったりもしました。

・静岡県は日照時間が長くて、農業が盛んで、海もあって漁業も盛んで、それに関連する企業もあります。医学は必要に迫られて、いろんな病院があります。それは、九州や北海道もそうかという、なかなかこんな恵まれた県はないなと思うと、やはり企業であったり、この産業界とうまく連携しながら、さっきのアナログではないですけど、現実に沿ったところ、あとはそれをデジタル化するところをもっと学びたい、もっと学べるっていうところに繋がられると、静岡県らしい教育になるのではないかと思います。もちろん、協力するところがないとできないことなんですけど、1つの案です。

○上野委員

・今、思ったことですが、企業のニーズということ考えると、1つキーワード入ってくるのは「サステナビリティ」という言葉なのかなと思います。私もその関連で今、研究とかもやっていますけれども、今日も暑く、農業政策においても、おそらく気候変動が与える影響ってすごい大きいんですよね。お茶農家もいろんなところで影響が出ていて、ある某ビール会社のレポートでは、そのうち北海道でワインが取れるかもしれないみたいなレポートもあって、つまり、気候変動とか環境変化というのがいろんな産業や農業にも影響を与える可能性があるわけなんです。静岡県の農業とか産業ということをイメージしているならば、パワーワードみたいなものを入れた方がいいだろうなという風に思います。

・今の小学生とか中学生の子が「SDGsが」みたいなことをよく言うので、サステナビリティの意識が、若い人の方が中高年より高いのかなと思うので、よりグローバルな、グローバルと言ってもいいのかもしれませんが、そういったパワーワードみたいなものを入れた方がいいかなとは思っています。

○齋藤委員

・静岡県はやはり広いんですよね。東部、中部、西部と3つに分けられると思うんですけども、その中でも産業界で力を入れているところは、例えば東部だと「ファルマバレー」で、医薬品と医療に力を入れていると思います。中部地区だと、「フーズ・ヘルスケア」「AOI」「MaOI」「ChaOI」や色々食べ物に関するものもたくさんあります。西部は「フォトンバレー」で、静岡大学工学部もありますし、浜フォトさんもあります。それぞれの地域で特徴がありますので、その地域の特徴と関連づけるような高校の専門教育というのが、うまく繋がっていくと、静岡らしさが見えてくるのかなと思うんです。

・そういう中で、先ほどの「マイスター・ハイスクール」という話は、資料9の工業高校のところで、「静岡型マイスター・ハイスクール」という言葉が書かれています。おそらく専門部会の方々では、こういった議論がさ

れていると思うんですが、この資料9については特に説明はないのでしょうか。これを基に、いろいろと議論された内容が今日の論点の例として書かれているという風に理解すればよろしいでしょうか。

○事務局

・これは、すでに取り組んでいる取組、具体的な取組ということで、例を挙げさせていただいております。この資料については、例えば、今後これをまた醸成して引き続きやっていく方がいいのかとか、例えばこの中で、この後の論点になると思うんですけども、こういった学び足りないから、こういった学びを進めていった方がいいんじゃないかという1つの参考資料として載せさせていただきました。
・特に何か見たところでご質問等あれば、また審議の中でご質問いただければと思います。参考資料ということで、現在、取り組んでいる例として挙げさせていただいております。

○岸田委員

・今の話ですけども、これはすでに取り組まれているわけじゃないですか。それに対して、どういう評価をされているかがわからないと、やっていますということはわかるんですけども、やっているだけで全然意味がないという評価なのか、これは非常にいいからこれまで以上にやっていきたいって考えていらっしゃるのか、その評価も含めて出していただかないと、すごくもったいないと思います。

○事務局

・検証が必要なところだと思いますし、その検証をもとにご審議いただく必要があるなと思います。ご指摘いただいた通り、そういった形で、資料を作りたいと思います。

○飯倉委員

・皆さんのお話を聞いていて思ったんですけど、「手段」と「目的」と「目標」をきちんと決めないと議論がぐるぐる回るのかなと思っています。例えば、静岡の産業に対してのアプローチということが出たんですけど、大上段としては、先ほど上野委員がおっしゃったように、キャッチフレーズではないですけど、例えば「成長と挑戦」のような題材があって、その下に、例えば「その問いを立てる能力」とか、「広く学ぶ能力」とか、「情報をキャッチアップする能力」とか「チームで行動する能力」みたいなのがあって、その下に手段として「どういうカリキュラムが必要なのか」という議論をしないと、思いながら聞いておりました。

○川田委員

・飯倉委員のおっしゃるような形でまとめていくのがいいのかなという風には思います。そうしないと、なかなか議論が収束していかないかなって感じがします。次回に向けて、そのあたりを検討させていただくということですね。

(2) 論点②「育成したい生徒像」に必要な学び(方向性)とは?

学びの具現化に向けて必要となる取組とは?

○川田委員

・続いて、論点2に進みます。
・育成したい生徒像を踏まえて、育成したい生徒像に必要な学び。方向性であるとか、育成した生徒像も含めていいと思うんですが、こういう学びが必要なのではないかということについても、ご意見をお聞か

せいただければと思います。

○村木委員

・質問です。前回までの審議会での意見が5つ出ているんですが、これは現状できていることではなく、これからの課題として認識されているということなんでしょうか。

○事務局

・前回までにいただいたご意見の中には、現在すでに似たような取組をしているものもありますけれども、主には新たにいただいている意見がほとんどになります。5ページの資料5は新しい観点というかご意見として載せている内容になっております。

・ただ、その取組と今具体的に学校が取り組んでいるものが結びついていくかというのは、今後ここで出たご意見を専門部会に落とした時に、どのような結びつきがあるかというところは繋げて、先ほどの評価に合わせて次回あたりにお示しできればなという風に思っています。

○村木委員

・まだ育成したい生徒像がぼんやりしている中で、何が重要かということは、なかなか言いにくいところがあるんですけども、入れていただきたいというのは、先ほど申しあげました「学び方の学び」みたいなところ。それから、西村委員も言われた「自分を知る学び」みたいなところです。

・「好奇心を持ってもらうことが大切だ」という意見が出ていましたけれども、自分が何に好奇心を持っているかわからないと、好奇心が持てないと思うんですね。これは学びなのか、それとも引き出してあげて、何かの対象物、例えばデジタルとかというものと繋げてあげるべきものなのか、よくわかりません。学びだけでできないのかもしれないですね。ただ、その起点として、自分を知る学びみたいなものが必要なのかなと思いました。

○新村委員

・学びに必要な方向性ですけども、いろんな意見の中で、岸田委員がお話された「地元への愛着」とか、齋藤委員が言ってくださった「それぞれの地域にある特色のある企業との繋がり」とかというようなことをすごく同感しました。

・そのためには、地元をよく知って、地元の学び、地元を愛するような具体的な学びを進めていく方向性というのは、1つあるかなという風に思います。それによって、地域や静岡県ならではと言いますか、静岡県の産業という風に戻っていく、支えられる生徒が育つ1つの方向かなというように考えました。

○川田委員

・質問です。村木委員の「自分を知る学び」は非常に大切だなと思います。例えば、どんなことが行われるといいのかなという、もしイメージがあればお聞かせいただけたらと思います。

○村木委員

・切り口としては、キャリア教育が1つだと思います。

・高校生のキャリア教育だと、自分が一体何に関心を持つのか、何だったら学んでいいと思うのか。例えば、洋服が大好きとか、髪の毛を切るのが大好きとかという女の子がいるんですよ。この子たちは学校の

勉強ではないからと言って、結構そういう好奇心を閉ざされしまうことがあるんですけども、そこを伸ばしてあげると職業になってくるのがよくあるんです。

・例えば工業高校でアパレルに興味があるとか出てくるかもしれないですけども、その子がつ、元々持っている好奇心みたいなものを引き出してあげる学びと言いますか、引き出してあげる環境を用意する。そういうものを表に出してもいいよという教育の仕方をするというのは、1つあるかなと思います。この、自分の中にあるものを探求する、そのための「場」や「問いかけ」を用意するというのも、キャリア教育の一つの形だと思えます。

○岸田委員

・私は、この審議会以外にも、公立高校のあり方審議会にも出ていて、その時に話があったんですけども、今、通信教育が非常に活発になっていて、自由な学びでやりたいことを追求だとか、本当にやりたいことが見つかりますよとか、社会で生き抜く総合力が身につくとかで、今すごく人気がそうです。そこでやってらっしゃる方の話を聞いたんですけども、例えば、ここの1番目に、商業と工業製品を作るだけでなく、経営的に考える学びというのはいいんですけども、じゃあ具体的に何っていうと何も出ていなくて、彼らの話を聞くと具体的にこうなんですって言うんですよ。自分たちだと、こういうことはできますよ。これに魅力を感じて、この育成したい生徒像ってあるんですけども、そういう生徒が学びたい場所を作らなくてはならないと思うんですよ。

・我々がやろうとしているのは、そういう生徒が学びたい場所を作っていかなければならないので、我々がそのような生徒像を作りたいというのはあるんですけども、まずは来てもらわなければならないので、必要な学びの方向性という形もいいんですけども、もう少し具体的に、静岡県の専門高校って何をすると、商業高校と工業高校と農業高校と1つの高校にしちゃいますとか。そういうことまで踏み込んでいかないと、本当に行きたいところがなくなってくる可能性が今後出てくるのかなと思います。

・どこまでやるかということなんですけども、非常に難しいんですけども、要は、我々としてどこまで踏み込んでこの審議会でも話をして、県は動いてくれるのかということとどの目線で発言しているのかなというの実はあります。結局、丸く収めましょうみたいな形になるのかなという風を感じています。

○事務局

・今、岸田委員がおっしゃられたように、前回の反省といたしまして、今回はゴール地点を定め、その次に大きな意味での学びの方向性。こういった人材を育てるにはこういった取組が必要なのではないかと。その後、資料4のところですけども、具体的に実際にどうやっていくのか、時間があればそのあたりまで話をしていきたいと思っています。その時には、資料8、9で、具体的にこんな取組があってということからお話したかったんですけども、確かに評価をした上で、検証した上で表に出さなければいけないかとは思ってはいました。

・それから、最終的にこの審議会でもゴール地点を決めた中で、やはりこういった学校があればこういった学びができていくとか、そういったところまでご意見としていただき、今後、少子化の中で、今クラス減ということで対応していますけれども、最終的には学校ってどういう風にあるべきかということまでは、踏み込んでいきたいと思えます。

・その点については、次回以降、そのような審議を考えているというのが、今お答えできるところです。

○上野委員

・方向性が2つあるかなと思っています。専門教育という部分を特化して考えるのか。または、よりゼネラルの方向に持っていくのかという、2つあると思います。これは解が出ない。

・私の実感ですけれども、この10年間ぐらい、少なくとも商業高校、工業高校も含めて、資格に頼った専門教育から、いろんなビジネスの現場と関わろうみたいな話とか、ゼネラルの方に振り切ってきたような印象があるんですね。その結果、商業高校出身だけれども、普通高校出身みたいな感じのタイプの子が本学に来ているなという印象はあります。

・それは、いい点と悪い点があって、いい点は、ゼネラルにやっているから、コミュニケーションが取れたり、調整能力があったりとか、プロジェクトもやっている経験があるので、大学においても、中心的な子が〇〇商業高校出身の生徒さんだったというのが多い。一方で、その子たちが、例えば専門性のある人になったのかというと、そうではなくて、結局、ゼネラリストみたいになっていったパターンが多くて、一昔前は、このことだけやってきましたみたいな、一芸はこれですみたいな感じで入ってきたんですけど、ほぼそういう子がなくなったというのが、今の少なくとも静岡の公立高校から進学している商業、工業高校の子たちはそんな印象になっています。

・是非はあるかなとは思っています。私もどっちがいいんですかと言われても、よくよくわからない。ゼネラルの子もスタートアップ企業に就職したりとか、それこそアカデミックチャレンジに参加した子で、変形ゼネラリストみたいな感じで、すごく一生懸命頑張っているの、それを高く評価できると思う一方で、専門性のある領域に行っただけではないので、そこはわからないなという感想のような話です。

○岸田委員

・高校生も大学へすごく進学されるので、高校生時代に大学を目指されると、そういう一芸じゃなく、全体的にやろうって考えて勉強されているのかな。

・企業側からすると、高校での求人が大変で、もうなかなか取れない状況なので、子供さん自体が工業高校でも大学を目指されているのかなという感じを企業からするとってしまう。

○川田委員

・資料9ですが、農業、工業、商業等、一緒にやっているとかそういう例はあるんですか。それとも、個別にやられているのでしょうか。

○事務局

・資料9を細かく説明させていただきます。

・「高度化する知識、技術への対応」を1つ例に取りますと、1番左の列、これは県内の例えば農業、工業、商業が全体として今活用したり取り組んでいる事業等になります。そして、真ん中の列については、すべての専門学科でやっているわけではなく、各校個別で取り組んでいる内容になっております。そういった中から、今後の取り組み案として、専門部会から1番右の列で、こういった学びが必要になってくるのかなという案が出されたものになっています。そして、下の方には、共通であるとか県の事業として今こういったことをやっているというものを参考に挙げています。

○西村委員

・かつては、企業における雇用関係は上下関係がはっきりしており、雇用する側が強い立場にありましたが、現在は労働法の整備などにより、より対等な関係に変わってきています。

その流れの中で、高校現場における教員と生徒の関係がどうなっているのか、イメージが持てていません。今の生徒はテレビや新聞よりもSNSで情報を得ており、ロールモデルも教員や身近な大人ではなく、SNS上の存在になっているように感じます。

そのため、社会に出た際に、年上の先輩たちをリスペクトする感覚が薄れており、従来との関係性とは異なっています。こうした変化が教育現場にどのように表れているのか、ぜひ現場の実態を教えてください。

○事務局

・今日は各部長さんも学校の代表としていらしていますので、部長さんに一言ずついただきますようか。

○久保田校長

・教師と生徒の関係性は、かなり変化が出てきています。

・先ほど出てきたアナログの技術というのは教員がある程度持っていますので、指導する、それから指導されるという形になっています。けれども、今の時代の変化の中で、企業に見学に行ったり、外部講師を呼んだりする授業は、基本的には教師もそのことについて初めて知ってということが多いため、どちらかというと教師と生徒が共に学ぶ。今、文科省は「学びの相似形」という言葉を使っていますが、相似形に近い形にならざるを得ない。今までは教員が学んだことを咀嚼して生徒に伝えていたけれども、これではタイムラグが出てしまいますので、基本的には生徒と教員と一緒に学ぶ。その代わりに、教員は自身の経験値を活用し、もう一度生徒とそれを振り返り、リフレクションするというようなことをしています。

・それから、先ほどの「サステナビリティ」というと、異常気象は農業高校も非常に大きな問題で、従来の栽培方法では上手に作物できないものですから、生徒と教員と一緒に試行錯誤をしながらやらなければいけない。今までは、教員がサポートしながら成功体験を生徒にさせ、生徒の自己肯定感を高めるということをしていたのですが、実際には、異常気象でスイカが上手にできなかったり、作物が取れなかったりという失敗事例も出てきているところがあります。これからの時代の農業の学びは、今、試行錯誤をしながら行っているところです。

○沼里校長

・西村委員の方から、教員と生徒の関係の変化ありますかという質問がありましたが、私はかなり変化を感じています。

・その背景には、おそらく今の学習スタイルが、昔は教員がある程度教え込む、座学もどちらかというと徹底的にいろんな知識を与えて、技術なんかも教え込むというスタイルでしたけども、今は、義務段階から高校まで、学びは主体的、対話的になっていっていますので、教員は、どちらかというと生徒を支援する。だから、教員が上に立ってではなくて、フラットな関係になりながら、学びの中で、生徒に題材を与えて、そして支援をするという形になってきているので、かなり関係性は変わってきているかなと思います。

・ただ一方で、専門高校の中の1つの特色として、実技を伴うような実習ですとか、例えば分かりやすく言うと、水産であれば乗船とか船の中の指導は、これはフラットではどうしても成り立たない。船自体が縦の関係もありますし、もう1つは、危険なことをさせる場合には、当然安全管理があるので、そういう場面ではかなり管理的というか、そういった場面もあります。

・ただ、本当に普通科の学校では、かなりフラットな関係になっています。専門高校でも、座学ではかなりそ

ういった支援をしていくような形。一部の危険を伴う実技では、昔ながらというか、安全面のところから、かなり管理的な関係もあるのかなという風を感じています。

○大澤校長

・教員と生徒の関係ですが、お二方がおっしゃっていたように、我々が高校生の時と比べると随分フラットな関係になっているかなというのが実感です。

・学校の教育活動は、授業以外にも部活動とか委員会活動とか、それ以外のいろんな相談事とか様々なものがありますけれど、授業以外のところで見ると、すごいフラットだなと感じます。特に生徒指導では、教員側にいろいろと気を付けなければいけないこともあったりして、昔とは随分違った様子です。

・授業に特化してみますと、共通教科、国語とか社会などでは、グループ学習とか探究学習を盛んにやるようになってきて、小グループでの学習に教員が入って、話し合いの中で助言したり支援したり、そういうスタイルが昔に比べて多くなってきています。

・ただ、工業の授業の中では、そういったグループ学習だけではやりきれないものもたくさんあります。安全の話も先ほどありましたけれど、ものを作る時に、最初からみんなで課題を見つけて探究しながらやりましょうというのは、ありえないです。基礎的・基本的なことは安全も含んで、きっちり教え込んで、それを基にして、課題発見など、次のステップに入らないと専門的なスキルは向上しない。そういう意味では教員の高度な知識や技術・技能が必要になってくる場面があります。

・実習等で実際に教員が手本を示して、それを生徒に見せつけて、生徒にやらせてみるとうまくできない。そこで、先生ってすごいんだなって。そういう場面を見せることによって、西村委員が「リスペクト」とおっしゃいましたけど、リスペクトされる。それも必要なことかと思っています。

・フラットな部分も大事なんですけど、フラットじゃなくて、生徒から技術面・技能面で尊敬される部分というのを見せないといけないという場面もあります。

・生徒の育成も大切ですが、生徒を育成するための教員の資質・能力の向上というのも非常に重要だと考えています。

○松浦校長

・教師と生徒の関係というのは、やはりこの10年来、変化があるなと私も思っています。

・やはり一番大きいのが、生徒の人権意識・感覚が、格段に上がっているなということです。昔は許されたような生徒への言葉がけが、今ではタブーになっていることが間々あります。ある不祥事の研修の中で、職員室の大人同士で言わないことを、なぜ生徒にだけ言えるんですか、と言われたことがあります。まさにその通りで、大人だろうが高校生の生徒だろうが同じ人間で、人権意識をしっかり教員も持ちましょうということで、昔は呼び捨てだったのが普通でしたけど、男子も女子も「さん」付けとか、女子に対して「何々ちゃん」なんていうのはありえませんが、「何々くん」というのも、LGBTQの関係でそういったものを受け付けない子もいますので、そういった感覚は教員も高まっています。

・先ほど上野委員から「スペシャリスト」「ゼネラリスト」という話がありましたが、20年ぐらい前には、商業もスペシャリスト育成と盛んに言われていたんですけど、やはりゼネラリストが多くなっています。これは、カリキュラム自体がそういう方向に行っているからです。一芸に秀でて、高度資格取得に特化したようなカリキュラムではなくなってきています。商業でいうと3年生で「課題研究」という、1、2年でやった学びを深める授業がありますが、正直、10年以上前は高度資格に特化した授業をやっていた。ところが、そこが探究的な学びの時間できっちりやりましょうという文科省からの通知もあって、だんだんと主体的で、対話的で

深い学びということで、答えのない問いを考えるとといった方向に商業も舵が切られていますので、生徒ができないというよりは、そういう方向にカリキュラム自体が行っているという風を感じています。

○鈴木校長

- ・本校は普通科と福祉科が併設されています。そのため、普通科の生徒が多くいるのですが、特に、普通科の生徒については、少し前に比べると随分フラットな感じになっているとは思いますが。
- ・他の先生方が言うてくださったように、授業のスタイルが変わってきているということや、今、人権意識の高まりもありますし、部活動での体罰にも十分気を付けないといけないということで、先生方の言葉遣いや生徒への対応は、以前に比べたら随分気を遣いながらやっています。
- ・本校の福祉科につきましては、福祉の介護実習がかなりたくさんあります。福祉のマインドを持って実習に行くために、特に福祉科については、人生の大先輩である介護を受けている入所者さんに対応するので、大人をリスペクトするという気持ちを持って学習ができていないかと思っています。

○西村委員

各校の校長先生のお話は、委員の皆さんにとっても非常に興味深かったのではないかと思います。企業の人材育成にも通じる点が多く、現場の先生方のご苦勞が伝わってきました。審議会でテーマを決めること以上に、現場の先生方の目線や感覚に耳を傾けることの重要性を改めて感じました。「生徒と共に学ぶ」という姿勢と、「教師としての指導をしっかりと貫く」というバランスも印象的でした。また、今後さらに価値観が変化し、従来のような経済成長しない社会においては「共創」「共感」といったキーワードが重要になります。感性やコミュニケーション力の育成が、これからの教育にとって大切だと感じました。

○村木委員

・先ほど上野委員から、専門教育とゼネラルな教育の2軸がありますというお話で、今の校長先生方のお話だと、カリキュラムがゼネラルの方向に行っているのもそちらの方向に向かわざるを得ないというようなお話でした。その専門教育からゼネラルの方に軸足を移されることによって困ったこと、弊害は起こっているのかということと、こうした生徒たちを受け入れる企業の側が、岸田委員や江頭委員が、専門からゼネラルに移行しているという現状をどのように捉えておられるのか、お聞きしたいなと思いました。

○久保田校長

・ご質問の内容は、スペシャリストとゼネラリスト、それから探究的な学びと技術を身につけるところのバランスが学校の中でどうかということでしょうか。

○村木委員

・ゼネラルの方に軸足が移っているということが、いい方に作用しているのか、悪い方に作用しているのかですね。

○久保田校長

・今、共通教科で多くの学校が「総合的な探究の時間」という時間を置いています。そういった部分で言う

とゼネラルな学びの方に移行しています。

・ただ、専門高校は元々の基軸が技術教育ですので、「目標達成型のプロジェクト」、農業で言うと、「よいスイカを作るにはどうしたらいいか」というプロジェクト学習をしているのですが、探究になると「課題解決型プロジェクト」なので、生徒が「目標達成型プロジェクト」で身につけた知識・技術を使って、地域課題を解決しようというところにいきます。

・普通高校の探究は、探究の仕方を学ぶだけで良いのですが、専門高校は技術教育なので、課題研究という授業の中で結論を出さなければいけない。今までは、簿記の検定試験を取るであるとか、しっかりとした技術を身につけるということを3年間でやってきたのですが、その上に「課題解決型」を求められているので、非常に専門を学ぶ時間が短くなってきて、専門性をしっかりと達成できないまま、目標達成型のプロジェクトがしっかりできないまま課題解決型に移ってしまう。すると、3年間の履修ではどうしても足りないということが出てきます。技術をしっかりと3年間学ぶ前に、ゼネラリストとしての、いわゆる大学入試に則した普通高校の学びのスキームが下りてきているものですから、そういった部分で言うと、技術者育成という部分が非常に弱くなってきています。

・それから、総合学科という学科は、「産業社会と人間」という共通科目をやってから、自分のコースを決めていく形になるものですから、もっと専門性のところが少なくなってきていて、3年間ではいわゆるカリキュラム・オーバーロードと呼ばれる。授業時間が足りなくなっているという課題が出てきています。

○村木委員

・わかりました。では、そういう高校生たちを受け入れている企業の側としては、どんな感じなんですか。

○岸田委員

・昔は我々の経理のところに、商業高校の子たちも結構入れていた。簿記か何かの資格を持って入ってきていた。最近ではなかなかそういう方も見えなくなって、いつの間にか大卒の子を採用するということなんです。結局、大学へ行って、簿記〇級を取りましたとか、そういう資格を持って入ってくる子を取っています。

・工業高校の子も来ていただいているが、それはずっと取っているんですけども、我々、工場を持っているわけではないので、工業高校でもガスを学んでいることはないので、基礎知識を分かっている、技術的なことはわかっている方に入ってきて、それをやっていただいています。その部分も実は昔に比べて高卒の子も取れなくなったということが大きいんですけども、昔だったら高卒の子がやっていたような仕事も大卒の子にお願いをしているかなという風に思っています。

・我々は、どちらがいいか悪いかという風には思っていないので、そういう人材を育てていただければ、それに企業は対応していくという形を考えているので、結局、企業側の方が、そういう人材が高校から出てこなくなってきたので、大卒や高専の子を代わりに就職をお願いしています。

・結論から言えば、高校でどういうカリキュラムでどうやっていただけるのかによって、企業側はそれに沿ってやるんですけども、先ほどの通り、今回、静岡県産業教育審議会なので、静岡県の企業に入っていたという面では、静岡県の工業でも農業でも、どういうものがあるというものを念頭において、高校で学んでいただけると我々としてはありがたいと考えています。

○大澤校長

・スペシャリストからゼネラリストという話が出ていますがけれど、工業はどちらかというと、従前からスペシャリストの育成をしており、ゼネラリストの育成ではないという感じです。

・学習指導要領で、工業の科目は60科目ぐらいありますが、例えば機械系の学科はこういう科目とか、土木系の学科はこういう科目と決まっています、工業高校は機械科とか電気科とか、土木科とか、小学科と言いますけれども、従前から、この小学科で生徒募集をしていて、その学科に適した科目を、生徒たちは学習しています。

・一方で、昔は、機械科だったら旋盤をやっておくとか、溶接やっとか。電気科だったら、電気工事を一生懸命勉強しようで済んだかもしれませんが、今、世の中は、いろんなものが乗り合っている感じで、機械だけではダメで、自動車を見ても、EVがたくさん出ています。EV自動車は機械の知識だけでもダメだし、電気の知識だけでもダメ。両方の知識が必要になってきます。

・これまで小学科に特化したスペシャリスト育成をしてきましたが、この先、小学科に特化したスペシャリストだけではなくて、工業の中のゼネラリスト、つまり自分の専門以外のこともある程度は分かる人材を育成する必要があるのではないかと感じています。そこが工業のこれからの課題だと感じています。

○沼里校長

・工業と同じで、実は水産もゼネラリストには軸足を移せない事情があります。

・本校も4学科の小学科を抱えています。その1つの理由は、例えば船舶の船乗りを育てていますが、これは国土交通省から養成施設の認定を受けることで、卒業時に海技士免許が取れるんです。定められた専門科目を履修しないとこれは認定されないため、薄めることができないんです。合わせて、例えば水産加工の缶詰とかもやっていますが、これも即戦力として求められているので、例えばHACCAPのことや、そういった一通りの製造に関する技術を身に付けて、現場としては即ラインに入れたいということ言われているため、これも薄められません。魚の養殖もそうです。だから、なかなかそのところは、その産業の求められている人材によっては薄く広くはできません。

・ただし、その代わり、学科を横断する形で、例えば6次産業ではないですけども、生産のことも知っていなければならないし、加工のことも知っていなければならないし、うちには流通科もありますけども、そういった形で流通のことも、つまり横の横断のところで相互理解を図るような形では工夫はしております。

○岸田委員

・科学技術高校ですが、卒業される方が昔に比べて格段に大学へ行かれるようになったと思うんですけども、今みたいに専門的にやっていっちゃうのであれば、高校から就職と、変わらないような気がするんですけども、なぜこれだけ大学へ行かれるようになってきているのか、我々からすると、非常に不思議なんです。

○大澤校長

・これが正解だという答えは、持ち合わせていません。

・ただ、静岡県の工業高校に進学してくる生徒たちの意欲というのは、他県と比べると非常に高いと感じています。

・そういう中で、静岡県の工業高校というのは、共通教科を履修する割合というのがすごく多いんです。逆に言うと、専門科目が少ない。大学に進みたいと思えば、それができる環境があると思います。そして、もともと学習意欲が高い生徒たちが、このようなカリキュラムで学習することで、工業高校でも進学できるということを知れば、上の学校に行ってみようという希望が出てくると思います。

・つまり、生徒たちの学ぶ意欲の高さ、専門的な勉強をさらにしてみようという、そういう表れだと思っています。

○岸田委員

・実は静岡県には技術的に非常に大きな企業さんとか、中小でも光った技術を持っていらっしゃる方もいっぱいいて、意外と工業系の生徒さんが地元でそういう企業やそういう技術などがあることをあまり知らないのではないかと。そこを合わせて、授業に取り入れてくと、そういう流れに行くかなと思いました。

○大澤校長

・おっしゃる通りだと思います。静岡県には、大きな企業もありますけれども、中小の企業もたくさんあって、その中小企業も高度な技術力を持っていると思います。海外にも進出している企業が数百家ありますが、B to Bの企業が多いので、生徒には企業名が伝わりにくいと思います。

・生徒たちはやはりコマースで目につく企業とか、自分の家のすぐそばの昔から知っている企業に目がいきがちで、技術力を持っているんだけど、直接私たち個人に関わる企業でないために、選択肢に入っていないのではと思います。県内には高い技術力を持っている企業がたくさんあるので、県内産業を担う人材育成の観点から、そこを学校として生徒に伝えていくよい方策を考えられればと思っています。

○江頭委員

・皆さんお話を伺いながら考えさせられるところがあるなと思っています。

・企業も従来はやはりゼネラリストを取りがちで、一時期よりは直ってきましたけど、の採用や、学歴偏重の傾向はありましたが、みたいなのところもあったので、そこも近年では多様性を重視しようという方向性では考え直すべきところではあるなと思っています。

・話が戻りますが、村木委員から出てきた「自分を知る」というところで言うと、多分、実業高校に行かれた学生さんは、僕は魚が好きとか、僕はロボットが好きとか、なんだかがあってそちらに進んだとするのなら、その専門的なところをまさしく自分が好きな分野だからとか、自分が得意だから学ぼうと、ある域までは「自分を知った」上で進んだ道ではないかと思っています。で、さらに実業高校は、それを専門的に学んでいく中で、例えば、そうは言ってもうまいかないこともあるし、人もいないし、もっと簡単にできるようになるにはどうしたらいいかなと、課題に気づき、どうやったら解決できるんだろうと、その解決方法を模索しやすい環境解決型になっていくんだと思うんです。けど、企業も最終的には課題を見つけ、それを解決できる人が欲しいです。

・今回、実はこの委員会に出てくるというのもあって、高校生を採用する取る時ってどういった人材を取るのか、採用側、あと現場側にも聞いたんです。その結果、やはり考えて、自分の知ってるの思っていることでどんなことができるかなと考えることができている生徒が必要ですよなと。

・私が先ほどいろいろと並べたものは、ある意味、企業に入ってから学んで身につけることができるので、今できることを幅広く知ってやれる人間が欲しいということ、最終的にはゼネラリストになってしまうのかもしれないですけど、入口はやはり専門性を突き詰めていって、それをより現実的に、幅広くもっと広くやるためには、もっと自分がやりたいようにやるためには、どんなことを学ばばいいのか気づけることが重要だなと思ったその時に、ひょっとしたら大学に進学する子もあるし、企業に入ってからもっと突き詰める子もあると思うんです。しということ、よって、答えがゼネラリストかスペシャリストかは出ないんですけど、ただ1つ言えるのは、九州の方では、半導体の専門を工業高校で習って、そのまま直で企業が採用しているという事例もありますので、スペシャリストとしてとことん突き詰めるという道も、特にこの実業高校だとかあるのかなと、お話を伺っていて感じました。

○川田委員

・私もスペシャリストがゼネラリストかというのは、なかなか難しいなと思っています。でも、工学系だと、自分の柱になる専門性のある程度身につけてもらって、その中で裾野を広げていくということが、共同研究を通してとかで、その企業の人と色々コミュニケーションが取れる能力であるとか、共同研究で別の分野もちょっと勉強しないといけないとかということで、いかに裾野を広げていって、富士山みたいな形にしていくのかということが重要なのかなというイメージは持っています。そここのところのバランスが、どれぐらいがいいのかというのはよくわからない感じはあります。

○齋藤委員

・今日の論点②のところは、すでに資料4の、黄色で囲まれたマーカーされている5つがありますが、これは後ろの資料5の2「育成したい生徒像」に必要な学び(方向性)に関する意見のところから抜き出されたものかと思います。

・改めてこれ(資料5の2)をもう一度見ていった場合、例えば下から4つ目に、「リベラルアーツも含めた統合的な教養教育」と、その下に、「基礎知識を定着させた専門性を深めることが重要」と、この2つはある意味共通している部分かなと思います。このような教養教育をまずは身につけると、それをもって、その上にあります、上から3番目の「地域の企業との連携が重要」であると。そして、「実践的で『深い学び』」、「企業側の視点を取り入れた学び」の3つが1つセットなのかなと思いました。これが2番目です。そして、そういったことを踏まえて、専門的な知識も含めた上で、最近ではこの「DX化の理解」とか「デジタルリテラシー」、そして「デジタル化についての共通の基礎知識」ということで、言ってみればこの3段階になるかと思います。

・1つ目が教養的な、幅広くゼネラリストになるべく知識。そして2つ目がスペシャリストになるべく知識があって、それを最新のデータとして活用するためのデジタル化ということで、3段階にまとめられるのかなと思って見ておりました。まとめではありませんけども、そんな感じていけるかなという気がしております。

・6ページの資料6ですけども、農業のところの1番下の「専門的取組」のところ、実は農業のところにだけ「専門職大学と連携した5年制、7年制教育の検討」と書いてありますけども、これは他にも静岡県内に大学がたくさんありますので、ぜひそのような連携をしていただければ、農業に限らず、工業も商業も水産も家庭も福祉も全て連携していくのかなと思います。

・探究の学習の時間もありますし、それから、静岡県内にはふじのくに大学コンソーシアムというのがありまして、大学と高校は連動しようという話が出ていると思いますので、どの分野でも、大学との連携が十分可能なのかと思います。それを強めていっていければという風に思います。

4 閉会

○事務局

・本日、委員の皆様方からご指摘いただいたものに関しては、次回、第4回審議会で資料としてお示しいきたいと思います。

・第4回の審議会は9月5日の予定をしています。